



南 侯司郎さん

南さんは「おぼんさま」として上野町の道場のお守り役を担われている。以前はお守り役の家が決まっていたが、昭和の中ごろ不在となり、町民の依頼によりその任を受け伝えてきた。推進員養成講座に参加したことをきっかけに、一念発起して2013年に得度を

受け、本覚寺（小松市）に所属する僧侶として前任者のあとを引き継がれた。道場では親鸞聖人と前々門

首のご命日のお参りが毎月行われており、20人ほどで『正信偈』のお勤めをしている。道場のお内仏へのお仏供のおそなえは町内の家々が毎日順番で続けられている。また、日々のお参りのほかに、歴代門首によるご消息を拝読してお講や町民の葬式

務所）で開かれる日曜講座や同朋の会などへ熱心に参加されている。現在は「小松教区真宗同朋の会代表者連絡協議会」の監事も務め、教区の青少年教化事業のホタル観賞にもご協力いただいている。また、数年間にわたり常磐会館の仏花の松を用意してくだ

お同行さん

あなたの隣の門徒さん

白山市上野町 南

侯司郎さん（77）

や法事なども行われることがあり、南さんは長い間続けられてきた仏事をお守りしている。

かつての鳥越地区には、上野町以外にも道場をお守りする僧侶が10人ほどいたが、現在活動しているのは南さん一人となった。南さん自身はまだまだ元気だが、後継者のことも気にかけている。

南さんは常磐会館（小松教

さっていた。決して表立つことはなくても、地域にとっても教区にとってもかけがえのない存在である。

500年以上前の蓮如上人在世のころ、能美郡（のみこおり・現在の小松教区）に浄土真宗の歴史の中で初めてお講が組織されている。以来、仏法興隆を担い、また財政面で本願寺を支える役割を果たしてきた。このような真宗門徒の生活の原風景を今も上野町では見ることが出来る。南さんをはじめとする上野町の方たちが、伝統を受け継ぎ、支えている努力を改めて知ることができた。



教区の情報
お届け中！

小松教区
ホームページ

真宗大谷派
小松教区
または
komatsu-
kyouku.net
で検索！

真宗大谷派（東本願寺）
小松教務所
〒923-0904
小松市小馬出町26
発行者 保木 悦雄
編集 小松教区教化委員会

立教開宗の礎 親鸞聖人伝②

私たちの宗門では二〇二三年、宗祖親鸞聖人ご生誕八五〇年に併せて、立教開宗八〇〇年の慶讃法要を迎えます。これに向けて、曾孫の覚如上人が宗祖のご生涯を仰ぐために書かれた『御伝鈔』をたよりとして立教開宗までの半生を3回にわたってたずねます。

法然上人との出会い

平安時代までの仏教は、貴族を中心とした支配層のためのものでした。

平安時代の末期、京都の東山の麓、吉水の地で法然上人はすべての人が救済の対象であるとする「専修（せんじゆ）念仏」の教えをひろめていました。

それは、様々な罪業を消し去ることができない悪人や戒律を保つことができない者でも救われるというものでした。なぜなら、それが阿弥陀如来の本当の願いだとする中国の善導大師の言葉を根拠としていたからです。

比叡山での念仏は、善行として心身を磨き悪業煩惱を抑えていくためのものでした。それは法然上人の教えとは全く違うものでした。

後に親鸞聖人は、法然上人を勢至菩薩の化身、聖徳太子を観音菩薩の垂迹（すいじやく）と讃えています。この二人に導かれて、生涯にわたり本願の念仏をたずねていかれるのでした。

然（しか）るに愚禿（ぐとく）釋（しやく）の鷲（りう）の厓（えき）、建仁辛酉（かのとのとし）の曆（れき）、維行（ぞうぎよう）を棄（す）てて本願に帰し、元久乙丑（きのとのうし）の歳（とし）、恩恕（おんじよ）を蒙（かぶ）りて『選択』（せんじやく）を書（し）き、

『御伝鈔』聖典727頁

法然門下となつて4年目、元久二（1205）年には法然上人が書かれた『選択本願念仏集』の書写を許され、上人により法名釋綽空（親鸞）と書き添えられました。また上人の姿を描くことを許され、そこへ上人によって真筆が書き添えられました。これは三百人あまりいる弟子の中の数人にのみ許されたことです。



『御絵伝』第六図より【真影銘文】

法然：1133～1212年。法然坊源空。浄土宗の開祖。15歳で出家得度をし、比叡山の黒谷で天台宗を学ぶ。43歳の時中国の善導大師の教えにより京都吉水で専修念仏をひろめる。著書『選択本願念仏集』など

信不退 行不退

そんなある時、親鸞聖人は法然上人に「往生には信心が大事なのか、念仏を称える行が大事なのか」と尋ねました。上人は、それはもつともな疑問であるとお応えになりました。翌日、親鸞聖人は三百八十余人の門弟を前にして「信が大事と思われる座、行が大事と思われる座へそれぞれお座りください」と尋ねられたのです。

多くは行の座へ着いたのに対し、信の座は聖覚法印（せいかくほういん）、法蓮房信空（ほうれんぼうしんくう）、熊谷直実（くまがいなおさね）そして親鸞聖人のわずか4人でした。最後に法然上人が信の座へ着くと、口々に文句を言っていた門弟等はひと言も言い返すことができなくなりました。これはおそらく念仏を称えることを善根として、称える自分を頼りとする自力の迷心なのでしよう。



『御絵伝』第七図より【信行分判】

聖覚法印：1167～1235年。比叡山で学び、天台宗に籍を置きながら、法然上人に師事する。京都の安居院（あぐい）に住した。親鸞聖人の先輩弟子で、比叡山を下りた親鸞聖人を吉水の法然のもとへ誘ったとされる著書『唯信鈔』

法蓮房信空：1146～1228年。比叡山の黒谷で法然上人と同室。後に法然の門弟となる。

熊谷直実：不明～1208年。法名は法力房蓮生。武蔵の国、熊谷に生まれ、関東の荒くれ者の異名を持つ武将。源平の戦いでは、源頼朝に臣従して多くの戦果を挙げる。一ノ谷の戦いで若い武將を追い詰める。後に首実検で、平清盛の甥でわが子と年の変わらない平敦盛（16歳）と判る。それがきっかけとなり世の無常を知り、出家を願う法然上人の門弟となる。

信心諍論

じょうろん

大師聖人（法然）まさしく仰せられてのたまわく、「信心のかわると申すは、自力の信にとりての事なり。《中略》他力の信心は、善悪の凡夫、ともに仏のかたよりたまわる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、更にかわるべからず、ただひとつなり。わがかしこくて信ずるにあらず。《中略》」

『御伝鈔』聖典729・730頁

またある時、親鸞聖人は聖信房、勢観房、念仏房以下の同門と言いつ争っていました。

「法然上人の信心と私の信心は少しも変わる所がなく、ただひとつです」と言う親鸞聖人に対して、門弟たちは「智恵第一と言われる上人と同じ信心とは身のほど知らず」と反論したのです。

法然上人にそのことを確かめると、「自力の信においては能力によつて違いはあるが、他力の信心は如来よりたまわる信であるから、源空（法然）の信心も善信房（親鸞）の信心も変わることはなくひとつであります」と応えられました。

私たちはどこかで、自分の行った努力に結果を期待してしまいましたが、同じように、信じる心の深さによつて往生が決まると思ひ込んではいないでしょうか。『御伝鈔』のこの箇所は、往生は如来の御はからいであるにも関わらず、自分で勝手に浄土さえも作り上げてしまっていることを知らされます。

承元の法難

南無阿弥陀仏を称えれば、全ての人が平等に救われる、とする法然上人の教えは民衆にひろまりました。しかし、そのことで旧仏教界から弾圧を受けることとなります。

かねてより法然教団に不満を持っていた奈良興福寺や比叡山延暦寺は、朝廷に対し念仏停止（ちようじ）を訴えます。しかしそれはすぐには受け入れられることはありませんでした。当時、摂政・関白の地位にあった九条（藤原）兼実は、法然上人の教えを仰いでいたからです。実は『選択集』が書かれた理由は、兼実が、すでに高齢にな

った法然上人が教化できなくなつた時のために、専修念仏の教えを書き残して欲しいという願いに応えたものでした。兼実のはからいもあつて訴えを抑えていたのです。ところが、建永元（1206）年、後鳥羽上皇が紀州熊野大社へ参詣に出掛けた留守中に、上皇の女官である松虫と鈴虫が法然上人の弟子のもとで出家をしています。そのことが帰京した上皇の逆鱗に触れることになりました。

承元元（1207）年、ついに念仏停止が言い渡されたのでした。

（次号へ続く）



『御絵伝』第十図より【念仏停止】
公卿が役人に念仏停止を伝える

【教化事業のご案内】

コロナ感染拡大に伴う対応等により
急遽変更や中止される場合があります

◇十二日講 毎月12日9時半～

【7月】日野賢之氏（西照寺）

【8月】塚谷真樹氏（燈明寺）

【9月】横山英昭氏（願船寺）

◇日曜講座

毎月第1・3日曜9時半～

【7月】3日・17日

【8月】お休み

【9月】4日・18日

◇郡中御影報恩講

7月23日（土）午前中

一般参加なし 会場 本覚寺

◇真宗入門講座

7月29日（金）19時～

8月26日（金）19時～

9月22日（木）19時～

講師 滋野井光氏（稱佛寺）

◇暁天講座

8月1日（月）5時45分～

講師 法岡敬人氏

（能登教区清琳寺住職）

8月2日（火）5時45分～

講師 難波教行氏

（教学研究所研究員）

両日 本会場 小松教務所

中継会場 真成寺・稱佛寺

・願成寺・静照寺

※会場記載のない事業は小松教務所

うららのお寺

來生寺 らいしょうじ

小松市園町

梯川のほとりにある來生寺は、かつて天台宗の寺院として青森県にあった。天文十四（1545）年、本願寺の第十世証如上人の教化にあつた惠流が浄土真宗に改宗してゐる。その後争乱に巻き込まれ堂宇が焼失してしまい、1640年頃、青森より現在地の小松市園町に移転し、新しい堂宇を建立する。文政八（1825）年、第十三代立法の時に経蔵である「転輪蔵」が建立された。内部は回転式八角形で一切経を収蔵しており、正面には釈迦如来座像が安置されている。また、建立の際に寄贈され小松市指定文化財になっている若杉焼青磁三具足が現存している。



【経蔵】



【若杉焼三具足】

現住職の藤秀悟さんは金沢美術大学を卒業後、40年間、福井県の仁愛女子短期大学でデザイン教育に携わりながら、仏教の教えを視覚的に表現し、わかりやすく伝え

ることをテーマとしてデザインの制作活動が続けてこられた。それらの作品の一部はポスターとして、玄関や本堂内にいくつか展示されている。現在、玄関にはウクライナへの軍事侵攻に関して、プーチン大統領を題材にした作品があり、そこには善導大師「観経疏（かんぎょうしよ）」の「経は経（けい）なり、経は鏡（かがみ）なり」という言葉が添えられている。また、本堂内には天狗の面をかぶった男と鬼の面をかぶった男が並ぶ作品があり、人間の心の中にある「鬼」と「天狗」を表現している。一作一作に込められたテーマや願いに触れ鑑賞していると、時間が過ぎるのも忘れる。

これらの作品がある程度たまる和本堂で個展が開かれ、今年の4月にも多くの方が作品鑑賞に訪れた。住職の藤さんは、これからも制作活動が続け、作品に触れた方々が少しでもお念仏の縁が深まって欲しいと願っておられる。



【4月の個展】

郡中の小窓



宝達志水町明円寺のご住職であられた松原哲雄先生のお話です。

先生がとある門徒さんのご法事で、「浄土からの便り」というお話しをされたそうです。そのあとお斎の席で、参列していた方から「さっきのお話の、浄土からの便りというのは、本当にあるのですか。見たことも聞いたこともありませんけど」と問われたそうです。

それに対して先生は「ここにだってテレビの電波が飛びかっているけれど、分からだろ。電波を受信するには、受信機が要るんや。テレビがあつて、電源入れて、チャンネル合わせなんだから。お浄土からの便りはこの身が受信機。それに聴聞というスイッチ入れないといかん。そしてチャンネルが合ったということ、信心獲得と言うんや」とお答えになったそうです。「この如来、微塵世界にみちみちたまえり」（唯信抄文意）のお心ですね。

小松教区教学研究室

『郡中学舎』室長

滋野井 光